

ブルトマンのアガペー理解に対して

遠藤 徹

筆者は既に、著書『《尊びの愛》』としての「アガペー」及びそれと前後する諸論考において、キリスト教が説く愛としての「アガペー」は、①神から人間への愛の場合、②人間から神への愛の場合、③人間から他の人間への愛の場合、さらに④自己への愛のいずれの場合も、基本的には対象を「尊ぶ」愛であることを明らかにすることに努めて来た。⁽¹⁾ 著書では語源的意味合いも探って、そうしたのであった。しかし、そういう筆者の見解に真っ向から対立するものとして、久しい以前のものであるが、ブルトマンの著書『イエス』の第三章第七節「愛の戒め」がある。⁽²⁾ その影響は極めて大だったのではないかと思われ、本稿はその主張に正面から対峙することに努める。⁽³⁾

一

論究に入る前に、今では必ずしも入手し易くない同書の該当箇所を川端純四郎・八木誠一訳で紹介することに

する。括弧内は、聖書の引用箇所の明示以外は、筆者が補うブルトマンの原文や筆者の補足説明である。

① 他人に対するこの態度は愛の戒めに要約される。この戒めは一般にキリスト教独特の要請、イエスがもたらした新しい倫理、とされている。しかしイエスにおける愛の要請を正しく理解しようとするなら、先ず二つのことを観察しなくてはならない。即ち第一に愛という言葉と愛の戒めとはイエスの言葉の中にはきわめて稀にしか出て来ない、つまり敵を愛せよとの要請として山上の垂訓の中にあられ（マタイ5・43-48）、更に神への愛と並ぶ隣人愛の要請として、最高の戒めの問いに対する答の中にあられるだけだ、ということである。だから重要な場所にあられるとは言えるけれども、それにしてもあまり稀なので、イエスもその教団も愛の要請をもって特別の倫理的プログラムを設定しようとは考えていなかったことがよく解るのである。むしろ愛の要請は神の意志を行なえとの一般的要求の中によく嵌めこまれる。あるいはこの要求は、他の人への態度を規定する限り、愛の戒めとしてあらわされる、と言った方がよい。これで第二のことも言われたことになる。つまりイエスもその教団も、愛の戒めがそれまで知られていなかった新しい要請だと考えてはいなかったということである。事実単にユダヤ教の文献において「汝自身の如く汝の隣人を愛せ」がしばしば律法の要約とされていただけではない（実際パウロも、愛は律法の完成であると言う。ロマ13・8-10）。異教の文献の中でも、愛即ち隣人愛と敵の愛は最高の徳の一つとされている。たとえばストア派の哲学者セネカは、「一般の福祉のために勞し、個々の人を助け、敵にさえ援助を与えて、倦んではならない」と言う。他の場所でセネカは自然的感情の反論と対決する。すなわち感情が、「そうは言っても怒りはこころよいではないか。苦に報復するのはよい気持ではないか」と言うと、セネカはそれに対して答えるのである。「否、善行為の場合、善に善を報いることは尊敬できる。しかし不正に

不正を報いるのはそうではない。前の場合には負けるのが恥辱であり、あとの場合には勝つのが恥辱である」。

② しかしここで愛の要請がヒューマニズムの思想 (Humanitätsgedanken) に基礎づけられているのは明らかである。すなわち身に不正を加えられても彼の平和は、彼の心的平衡の調和は、破られることがない、というのが人の理想に属するのである。破られたら恥辱なのである。従って人は自己を怒りや報復欲の上に高め得るだけの倫理的エネルギーを行使できなくてはならない。誰かに撲られても、そんなことはまるでロバに踏まれたようなものだと考えよ。唾を吐きかけられても、海が泡をはねかけたようなものだと思え。誰がそんなことで怒るものか。イエスの愛の要求は全然別様に基礎づけられている。すなわち性格の強さや人格的品位 (persönliche Würde) の思想ではなく、服従の思想、自己主張の断念という思想に基礎づけられている。

③ 更に一つのこと加わる。古典的文献の中では愛の要請は更に他の思想によって基礎づけられている。セネカはこれを短い言葉にはつきりと表現した。「人は人にとって何か聖なるものである」。この動機づけも人間から出発する。人間の自己価値 (Selbsterwert) が所与のものとして確立されているのである。人間は何か価値あるもの、聖なるものであるから、人間愛、博愛の要請が成立する。そしてその至高の冠が敵への愛なのである。イエスは愛の要請を基礎づける時、他の人が人であるがゆえに持つ価値に言及しない。愛の要請は具体的状況の必要によって基礎づけられるのである。

④ ゆえにイエスは愛を人間の完全性に属する徳とも、共同体の福祉のための援助とも考えていない。むしろそれは人が人に対して立つ具体的生状況での、意志の自己超克なのである。従ってイエスの愛の要請は、その内容を更に詳細に規定することもできないし、また一つの倫理的原理とみなして、それから個々の具体的要請を導

出することもできない。もし人間に関する特定の理想にもとづくヒューマニズム的な愛の戒めであつたら、こうしたことは可能であつたらう。隣人を、敵を、愛するために何をしなければならぬかは語られない。各人がそれを知りうる事が前提される。従つてイエスの愛の要請は、倫理の新原理や人間の尊厳の新理解の啓示では全然ない。人は愛において彼の「魂」の無限の価値を獲得しそれによって何か神的本質にあずかるというのではない。むしろ愛は単に服従の要請であり、愛は、人が人と結ばれている具体的生状況の中でこの服従がどのように行使され得るかそしてまたされるべきであることを示すのである。

⑤ まさにこのことが、隣人愛の戒めと神への愛の戒めとの結合から生ずるのである。この結合も自体としてはユダヤ教も持たなかつた特に新しい思想というわけではない。最高の戒めの物語自体がこのことをなお示している。

一人の聖書学者がこの議論（イエスとサドカイ人の）を聞いていたが、イエスがあざやかに答えられたのを見ると、進み出て尋ねた。「すべての掟の中でどれが第一ですか」。イエスは答えた。「第一はこれである。——聞け、イスラエルよ、われわれの主なる神は唯一の主である。あなたは心の限り、精神の限り、力の限り、主あなたの神を愛せよ。第二はこれ。——隣人を自分のように愛せよ。これらよりも大事な掟はほかにない」。

聖書学者が言った。「先生、ごりつばです。神はただ一人で、かれの外に神はない、とは本当のことを言われました。また心の限り、精神の限り、力の限り神を愛することと、隣人を自分のように愛することとは、どんなはんさいや犠牲にも勝っておりません」。

イエスは彼がものわかりよく答えたのを見て、「あなたは神の支配から遠くない」と言われた。(マルコ 12・28―34)

⑥ この二重命令は、イエスの宣教の連関の中にあらわれると、その全き真摯さを獲得するということができず、そう言わなくてはならない。その時その意味はこうである、神を愛せよまた隣人を愛せよとの両方の掟は、隣人愛がそのまま神の愛であるという風に同一なのではない。この誤解は、隣人愛を人間愛の意味に (*im pñlian-thropischen Sinn*) 理解し、人間に自己価値 (*Eigenwert*)、神的なるもの (*ein Gñttliches*)、を見る場合にだけあらわれる。この時人間は本当に神への関係を失わない、それを人への関係で代用したのである。やはり神を愛することはできない。だから人を愛せよ。まさしくそこにおいて神を愛していることになる、というのだ。否。むしろ最高の律法はこれである。神を愛せよ。我意を従順に神意に服せしめよ。そしてこの第一の掟が第二のものの意味を規定する。すなわち私が隣人に対してとる態度は、私が神に対してとる態度によって規定される、という風なのである。その態度とは、神に服従する者として、我意を克服し自己主張を断念する者として、私は隣人に向かって立ち、神に対してと同じく人に対しても犠牲になる備えができている、ということである。

⑦ そして逆に第二の掟が第一の掟の意味を規定する。私が隣人を愛することにおいて、私は神に対する服従を確証するのである。ゆえに神に対する言わば宙に浮いた服従、私が人として人々の中に立っているその具体的状況から切り離された服従、直接神に向う服従は、存在しない。私が隣人に示す善意、同情、あわれみ等は、私が神に対してすることではない。それは私が真実隣人に対してすることなのである。ゆえに隣人は言わば私が神への愛を行なうための道具なのではないし、隣人愛は言わば神を横眼でみながらなされ得るものではない。むしろ

る私が自己の意志を神の意志に全く委ねる時にのみ隣人を愛しようるように、私は、神が欲するところを私の意志とし、真実に隣人を愛する時にのみ、神を愛するのである。

⑧ そしてこの愛は、そこから具体的要請が導出されるような原理ではないけれども、決して無内容ではなく、従って、私は愛するためには一体何をしなくてはならないのだろうかと問う必要もない。そう問う者は、自分のように隣人を愛するということが何であるかを全然理解していない。なぜなら自分を愛するということは何であるか彼はやはり実によく知っているものであり、それも自己に関する理論や体系がなくても知っているのである。というのは自己愛は道徳の原理ではなく、自然的人間の態度だからである。ゆえに私が自分のように隣人を愛すべきであるなら、私は具体的状況の中で私の行為の方向を明らかに知っている。だからキエルケゴールがこう言うのは正しい。「隣人を自分のように愛すべきであると言われる時、この掟は合鍵でするように自己愛の城を開き、自己愛を人から奪う。もし隣人愛の掟が自分のようにという一片の言葉以外のもので表現されていたら、掟は自己愛を屈服させることは出来なかつたであろう。この一片の言葉は実に用い易いけれども、実は永遠の緊張力を持っているのである。この自分のようには曲げもこじつけもできない。それは、永遠の鋭さを以て裁きながら、人が自分を愛しているその内奥の隠家に侵入する。自己愛に言い訳の余地は一寸も残さず、少しの逃避も開けておかない。何と驚くべきことだろう。人はどのようにその隣人を愛さなくてはならないか、長い気の利いた演説をぶつことができましょう。しかし自己愛はいつも言い訳を、逃避をしつらえる術を知っている。それは事柄がやはりすっかり尽くされてはいないで、一つの場合が見逃され、一つの点が充分正確或いは拘束的に記述表現されていなければならない。しかしこの自分のように——実際どんなレスラーも、この掟が自己愛を組み

伏せるように、敵をこうもしつかりと、こうも逃げられぬように、組み伏せることはできないのだ。」

⑨ ゆえに——これも再びヒューマニズムの人間理想の場合にのみ可能なのだが——隣人愛にはやはり正当な自己愛が、必要量の自己顧慮⁵⁾が先行する筈である、なぜなら、隣人を自分のように愛せよというではないか、だから自己愛は前提されているのである、などと言うのは無意味である。そう、自己愛は事実前提されている。しかし人が先ず学ばねばならないもの、あからさまに人に要求されねばならないものとしてではなく、まさに克服さるべき自然的人間の態度 (die Haltung des natürlichen Menschen) として前提されているのである。この隣人愛の要求には特に隣人をゆるす心構えが含まれている。この心構えはここに要求されている愛を多分一番はつきりと性格づけるものであろう。というのはいゆるし⁶⁾の思想が真摯に受け取られるなら、この要求はおよそ自然的自己愛に対立しうる最も困難なものなのである。復讐を断念し、敵を助け、彼のために祈りをすら捧げる——これらすべてへと決断することはできましょう。しかし彼をゆるすとは。これは明らかに彼を真に愛している時にのみ可能なのである。ゆるし⁷⁾の要請がどんなに真摯に考えられているか、イエスの答えが示す。「兄弟がわたしに対して罪を犯した時、何度赦してやらねばなりませんか。七度まででしょうか」という問いに対してイエスは答える。「いや、わたしはあなたに言う、七度までどころか、七度を七十倍するまで」(マタイ18・21以下)。すなわち赦しは限度がある義務、果たし尽くすことのできる義務ではなく、それは人が隣人に対してとるべき態度、いかなる自己主張も知らぬ態度から、必然的にあらわれるのである。

⑩ さて最後に、愛は魂の生活を活発に或いはやさしくする感情ではなくて、特定の意志の態度であることも明らかである。隣人への、敵への愛は、墮落し切った主体の中にすらなお神的なるものを、高貴な失なわれるこ

とのない人間性の閃きを感じるとる同情や讃嘆の感情によるものではなく、神の命令によるのである。(Die Liebe zum Nächsten und zum Feinde beruht nicht auf einem gerührten und sentimentalen Gefühl der Sympathie oder Bewunderung, die auch im verworfensten Subjekt noch den Funken des Göttlichen, des edlen, unverlierbaren Menschentums herausspürt, sondern sie beruht auf den Befehl Gottes.) ゆえに愛は特別強い感動などではない。感情や感動はあらゆる可能なニュアンスや変化において人間の心的生活をみたすのである。もし愛が感情や感動であったら、愛と憎とに並んで第三者、無関心があり得ることになる。これに反してもし愛が神に服従して他者の幸いのために自己の意志を犠牲にすることであるなら、人間にとっては明らかに愛と憎とのあれか、これかしかない。愛しない者、無関心な者は、自然的感情、自然的自我の魔力にとりつかれていて、憎しみの中にある。というのは私達によくする人にだけよくするのは、私達に好意を持つ者にだけ好意を持つのは、罪人や異教徒と同じように行爲することであり、すなわち自然的、利己的人間の振舞なのである。そして実際同情の感情や感動に基礎づけられた愛は本当は自己愛なのである (in Wahrheit ist ja die Liebe, die in Sympathiegefühlen, im Affekt begründet ist, Selbstliebe)。というのはそれは好みの愛、選ぶ愛であり、好みと選びの尺度は自己だからである。友情や異性の愛は自然的自己の表現である。それらは自身としては善くも悪くもない。それらは人の意志が悪い時に悪いのである。しかしそれらの中に神による愛の戒めの成就をみるのは、この戒めをいつわり、従順な隣人愛の代りに自己愛をすえることである。なぜなら隣人とは、私の同情が結びつけるこの人あの人ではない。誰もが隣人なのである。しかし一般的に誰もというのではなく、出会いの具体的状況における各人なのである。愛すべし、というのである。意志が語りかけられている。すなわち人は、神によって決断の中へとおかれていて自己の

自由な行為によって決断すべきなのだ、という前提のもとに語りかけられているのである。愛が感情と考えられている場合にのみ、愛を命ずるということは無意味なのである。愛の戒めは、愛が意志の態度と考えられていることを示す。

⑩ ゆえにそのような愛は明らかに何か弱いもの柔弱なものではない。それは実際センチメンタルな感情を本質とするものではなく、隣人をその経験的所与内容からみて何か特別に立派なものと、讚嘆したりいつくしんだりしなくてはならないものと見るのでもない。愛は他者の個性をよろこび、それを育てることをよろこぶことでもない。というのはイエスにあつては人は全然そのように個性としては見られていないのである。人は神の要請下に立つものと見られている。こうして其の隣人愛は隣人を甘やかしたり柔弱にしたりせず、彼をも決断の中に立つ者として見、それに従つて行為するであろう。イエスの悔改めへの呼びかけも愛の業として理解されるべきではないだろうか。

⑪ 理想主義的義務論、徳論、或いは善論、価値論の意味でのイエスの倫理を求めることがどんなに誤りであるか、どんなに具体的倫理的決断一切が人に責任として負わされ、結局一つのあれかーこれか、服従か不服従かに帰着するかを、多分最終的に明らかならしめるイエスの言葉がある。それはこの言葉である。「だからあなた達は天の父上が完全であられるように、完全であれ」(マタイ五・四八)。

この言葉は勿論他の形でも伝えられている。「あなた達の父上が慈悲深くあるように、慈悲深くあれ」(ルカ六・三六)。

⑫ しかし多分第一の形の言葉の方が古いのである、ルカは連関上後に続く言葉に結びつくように変えたので

ある。しかしこの言葉を理解するためには——これがイエスの真正の言葉、従ってギリシャ語ではなくアラム語で語られた言葉であることを前提した上で——ここにギリシャ的な完全性の概念を持ち込んでほならないことを考慮する必要がある。ギリシャ的概念では完全なるものとは理想的なるものなのである。すなわち行為は様々な段階を通過しうるのであるが、その最高の可能性がそうなのである。ゆえに完全なるものとはあらゆる相対的価値の頂点なのである。これはイエスの神観にふさわしくないと見えよう。イエスの神観によると神は相対的価値とは直接に関係しないのである。更にギリシャ的完全性概念は「全き」というセム語の概念とは全く違う。これはセム語ではむしろ絶対的概念である。これはほぼ「健やかな」、「全き」、を意味する。人間について言われる時は、「まっすくな」、「誠実な」、を意味することもある。イエスの言葉もこれに従って理解すべきであろう。その言葉の意味は、人間の態度は全的で、分裂していかないものであるべきだということ、あれもーこれもであつてはならぬということであろう。誠実で素直で揺がず、よろめかない。そしてこの要請は神の本質から基礎づけられる——ここでもただあれかーこれかだけがあり、あれもーこれもはない。ゆえにこの言葉はもう一度イエスの要求の全重量を表現する。即ち人間は決断の中に立ち、この決断は人にとって何か相対的なもの、発展の一段階、ではなく、神によって立てられたあれかーこれかであり、こうして人の決断は決定的性格を持つのである。彼は決断において義人かあるいは罪人になる。

⑭ さて、この要求は不可能ではないのか、そしてひとが罪人であるとすればどうなるのかという問いがもう一度起こってくる。

さて、以上のブルトマンの主張をどう受け止めるべきであろうか。筆者が真つ先に驚きを持って受け止め、且つ疑問を呈さなければならぬことは、彼が愛の第二の戒め「隣人を自分のように愛しなさい」の中に含まれる自己愛について、「自己愛は事実前提されている。しかし人が先ず学ばねばならないもの、あからさまに人に要求されねばならないものとしてではなく、まさに克服されるべき自然的（自然な）人間の態度として前提されているのである」と述べることである。「隣人を自分のように愛しなさい」は言うまでもなく、「自分を愛すように隣人を愛しなさい」であり、それは「自分を愛しなさい。そしてそのように隣人を愛しなさい」であるはずである。それを「自分を愛すことを止めて隣人を愛しなさい」に置き換えるなどということがどうしてできるのか。それは余りにも乱暴ではないか。「自分を愛しなさい」と命じられる以上、それは既に自然に備わっている「自然な人間の態度」としての自己愛ではあり得ないはずではないか。⁽⁶⁾

ブルトマンはなぜこのような無理を犯してまで自己愛を排斥するのか。それは明らかに「自己愛」を直ちに「自己中心的な愛」、言い換えれば「利己的な愛」だと決めてかかっているからである。しかし自己愛が直ちに利己的な自己愛だとは誰が決めたことか。⁽⁷⁾「隣人を自分のように愛しなさい」は、「自己中心にならないように、自分をも隣人をも共に、同等に、愛しなさい」と教えているのではないのか。そのように同等に自分と隣人を愛すことは「すべての人を等しく愛される神の意志」に深く一致していることではないか。もちろん他者を出し抜い

て自己を優先させる利己的自己愛は、おそらくあらゆる生命体におけると同様、人間においても本源的である。利己性は絶えず支配の機会を伺っている。その利己性を排除しなければ、隣人を自分のように愛すことは成し遂げられない。従ってそのことも含ませるのであれば、隣人愛の戒めは「利己的な低次の自己愛を斥け、非利己的な高次の自己愛に立って、隣人を自分のように愛しなさい」であろう。いずれにせよ、自己愛はすべて利己的で、低次のものだという根拠のない独断はきっぱりと排除されなければならない。高次の自己愛は自己を尊び愛す（自己を高めるように尊んで愛す）とところに成立することを踏まえれば、隣人愛の戒めは「自分を尊び愛しなさい。そして同じようにあなたの隣人を尊び愛しなさい」であるはずである。

以上のことを見た上では、次の言葉もきっぱりと斥けなければならない。「自己愛は道徳の原理ではなく、自然的（自然な）人間の態度だ」。「自己愛」で低次な自己愛を指すならそうである。しかし高次の自己愛、自己を高めようと愛す自己愛、自己を尊び愛す自己愛は道徳的原理としての自己愛であり、それは全体が道徳的原理である「隣人愛の戒め」の中に是非とも組み入れられなければならない。

三

ところで、利己的な低次の自己愛を斥けて、高次な自己愛に立つことは、前者（利己的の自己愛）が自然なままの人間において本源的なものである以上、容易なことではない。それは利己的の自己愛を「殺す」ことよってのみ可能であろう。しかも人間が一生命体として生きている限り、それは本源に生き続けるのであるから、隣人愛

の行為はその都度、それをねじ伏せ、抑えつけ、生きて働くことがないようにしなければならない。そこには最も強力な意志の働きが求められることは間違いない。その意味で、隣人愛は意志的なものだと言ふことは正しいはずである。「愛の戒めは、愛が意志の態度」であることを示しているであろう。ただ、問題は、それが行為者自身の意志のみによって可能なかである。隣人愛は神の助けなしにも可能なか。筆者のブルトマンへの第二の疑問は、彼にはそう考えられているくらいがなくてはならないという点にある。

このことと密接であるが、更にもう一つ筆者に疑問に感じられることがある。それは、ブルトマンは自己を犠牲にする場合だけを考えていて、という事は、相手は愛さず、自分のみが愛す一方的な愛の場合だけを考えていて、相手と自分の双方が愛し合って平和な関係に到るという場合が想定されていないと思われることである。確かに、そういう平和が達成されるときでも、利己性は両者の根底に死ぬことなく存在しているのであるから、それを抑え込む意志の働きは双方に必要なことは確かである。しかしともかく、一方だけが犠牲になるのではなく、両者が共に利己性を克服して、平和な関係に立つことこそが神が望みたものではないか。言い方を換えれば、相手も利己性を克服して平和な関係に到ることを望んでいることを前提にして相手に向かうことが真に「自分を愛すように隣人を愛す」ことであり、それがまた神が望み、イエスが教えておられることではないか。初めから相手が利己的な人間であると決めてかかって隣人愛の実践に臨むことは、独善的である。そのくらいがブルトマンにないか。相手が利己的な人間である場合を覚悟して、それに備えて、意志の決断を根底に持ちながら接することは求められるであろう。そのことをブルトマンが述べているのであれば、それは正当である。しかし双方が力を合わせて愛し合う場合を視野に入らず、自分のみが愛す場合を想定して考察を行うことは視野の狭窄である。

一言で言えば、隣人愛の掟を考察するに当たって、「敵を愛す」場合だけを考察することは考察自身を半死半生にさせることである。果たしてブルトマンにそれが無いのか？

以上の疑問を端的に言い表せば、隣人愛の実践は、(1)神の愛の働きかけの内になされる場合を考察しなければならず、また(2)隣人からの愛の働きかけに応じてなされる場合の考察をも含まなければならないはずであるのに、ブルトマンでは行為者の人間が一人で単独に愛す場合しか捉えられていないいきらいがあり、それが彼の考察を著しく矮小化させているということである。

(1)から見て行こう。一体隣人愛の実践の場面で、神は人間にどのような働きかけて来られるのか？ブルトマンはその点をどう見ているか？イエス自身はその点をどう教えているとブルトマンは見ているか？答は、そういう場合の考察は彼には「一点もない」である。しかし聖書そのものはどうか？

何よりも先ず、イエスは隣人愛の実践を、学び手を深く愛しつつ説かれたのではないか。

イエスは彼を見つめ、慈しんで、⁽⁸⁾ *(symponein)* 言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持つてい
る物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いな
さい。」(マルコ10・21、新共同)⁽⁹⁾

この記事は、イエスが学び手を愛しながら、そしてそのことを学び手に十分に伝えながら、つまり「見つめ、慈しんで」、隣人愛を教えていることを極めてよく示しているのではないか。しかも「天」を指し示しつつそう

しているのではないか。言い換えれば、神が学び手を愛しておられることを学び手に伝えながら、否、神が学び手を愛しておられるその愛をそのままイエスが取り次ぎながら、学び手に隣人愛を教えることに他ならないのではないか。

このことは次のように記されている場合も同じである。

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ(ἐπιλεησύνῃ)、いろいろと教え始められた。(マルコ 6・34¹¹)

あなたがたの父が憐れみ深い(ἐπιλεησύνος)ように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。(ルカ 6・36¹²)

イエスは(i)天の父(神)が憐れみ深い方、深い愛アガペーの方であることを、(ii)誰よりも先ずご自身が学び手に深い憐れみを示しながら、深い愛を表しながら、言い換えればご自身が天の父(神)と一体になりながら、(iii)「あなたたちも深い憐れみの人、深い愛の人となるように」と説かれたことが、聖書にははっきりと記されているのではないか。

ここからはブルトマンの説くところに欠けているものが一挙に明らかにされるであろう。ブルトマンは「神の意志への絶対服従」こそがイエスの教えだと説くのであるが、では、「神の意志」の内容は何か、神は何を意志しておられるのか、ということについてはどこにも、一言も、説明していない。神の国(支配)の実現というこ

とは無論考えられているが、神の国とはどういう国なのかについては何も述べない。「神の意志」と言うとき、彼はそれによって「神の愛」を排除しているのか？「神の愛ではなく、神の意志への絶対服従だ」と考えるのか？「神の愛」を排除してはいないと言うのかも知れないが、しかし「神の愛への絶対服従」という言葉は奇異なのではないか？「絶対服従」は最も強い意志の行動であり、それは服従すべき相手があるかにかかわらずなく、自己を殺して服従することであるはずである。しかし限りなく深い愛の相手には、人は自らの身を相手の両腕の中に投げるとしても、「自らがそうする」というよりも、「そうさせられて」そうする、いや、むしろそう「なる」、のではないか。そしてイエスは、神と一体になりつつ、この「神一人」の関係、つまり「神の愛に人が応答する関係」へと人を招き、またその関係が限りなく「人一人」の間にも広げられて行って、「神の国」——神の愛の下で、人々が「主」と仰ぐ神を、また互いを、そして自らをも、尊び愛す「愛の共同体」——が地上に到来することに、あなたも神イエスと一緒になって力を尽くして欲しいと呼びかけているのではないか。——
「山上の垂訓」の次の一節がそれをよく言い表しているように。

憐れみ深い人々は、幸いである

その人たちは憐れみを受ける。(マタイ5・7)¹⁴

「その人たち（つまり憐れみ深い人々）は憐れみを受ける」とは誰から憐れみを受けるということか。「憐れみ深い人々は、真っ先に、神イエスから、そしてまた、相手の人々から、また周囲の人々から、憐れみを受け

る」ではないか。神―イエスの愛に包まれる中、人々が愛し、愛される、愛し合いの共同体こそ、イエスが説いた「神の国」と呼ばれる世界ではないか。

さて、(1) (神の愛の働きかけの内になされる場合) の問題の考察は、最後には(2) (隣人からの愛の働きかけに応じてなされる場合) の問題への考察に導かれた。イエスは「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける」との言葉を、一人の人間も洩れないすべての人間に向かって呼びかけている。隣人愛の実践は、初めから相手は隣人愛と無関係な人間だとの想定の中で実践されるべきなのではなく、むしろ相手もそれを喜んでくれるはずであることを信じながら、――その「信仰と希望と愛」の内に――実践されるべきなのである。もちろん、相手が過去に極度に不幸な、困難な状況に置かれたために、この信仰―信頼―信念を持ってない場合はあるであろう。相手のその状況を知ったときには、そして相手から激しい拒否や反感や攻撃すら受ける場合には、その時こそは、「自分を殺す」決断の内での愛の実践が求められるであろう。ただ、そのときでも、それは愛のない意志の決断ではなく、「愛と意志の決断」、否「愛からの意志の決断」ではないか。「愛すべし」ではないか。⁽¹⁵⁾

四

上に見たことは、ブルトマンの主張が全面的に間違っているということを示すわけでは、勿論、ない。なぜなら、こちらが純粹な愛の気持ちで相手を愛すのにもかかわらず、「相手から激しい拒否や反感や攻撃すら受ける

場合」はあるはずであり、その時には「神からの」愛の内に」そして「自らの」愛から」ではあるが、「神の意志への絶対服従」としての「意志の決断」が求められるからである。否、時には、「神からの」愛」も感じられず、「自らの」愛」など皆無な中で求められるかも知れない。そういう中でも、イエスの命令は「神の絶対的な命令への自己犠牲的服従」を指す意志の決断の命令かも知れない。

そればかりではない。何よりも、利己的な自己愛は、いつ、如何なる場合にも、行為者を支配しようと隙を狙っているのであり、愛の実践は終始それとの闘いの内に遂行されなければならないであろう。

従って、隣人愛は、その根底では、あらゆる瞬間に「神の絶対命令への自己犠牲的服従」の「意志の決断」に支えられなければならないのであり、その点を指摘する限り、ブルトマンの主張は揺らぐことなく正しいはずである。ただ、それは根底の土台の話である。当然であるが、土台だけでは建物は建たない。土台の上に築き上げられるべき建物全体の構想はどうか。彼には「敵を愛す」場合の考察が、そしてその場合の考察のみがある。ということとは、敵でない隣人を愛す場合の考察が欠けている。否、敵を愛す場合でも、従って、「神の絶対命令への自己犠牲的服従」の「意志の決断」の内にある場合でも、「神は自分と共に彼をも愛しておられる」ことに思いを致さないでよいのか。自己犠牲の意志の決断からは悲愴な思いと悲愴な形相ぎようちゆうが露わになるであろうが、それはそれでよいのか。長崎で殉教した二十六人の聖人達の顔が天上の喜び、聖なる喜び、に輝いていたということはどう受け止めるべきか。それは殉教者のすべてに共通であったのではないか。

ブルトマンの主張の全体は、一言で要約すれば、ヒューマニズム的な愛の思想に対してイエスの愛の教えを対照させているものだと行うことができるであろう。「ヒューマニズム」とは一般に「人間性に高い価値を認めて、その十全な発揮を目指す立場」だと言ってよいであろうが、ブルトマンによれば、セネカの愛の思想はまさにそういうものである。「ここ（セネカ）では愛の要請はヒューマニズムの思想に基礎づけられている」。セネカは「一般の福祉のために勞し、個々の人を助け、敵にさえ援助を与えて、倦んではならない」と言う。彼は同胞を愛すことだけでなく、「敵を愛す」ことさえも説いているのである。セネカによれば、善行は行為者の「尊敬できる」人間性を示している。しかし敵の「不正に不正を報いる」ことはそうではない。自分の「身に不正を加えられても彼の平和は、彼の心的平衡の調和は、破られることがない」ということこそが「人の理想」にかなっていること、高い人間性を示していることなのである。

しかし、ブルトマンによれば、セネカが愛の行為を呼びかけるのは行為者の側の高い人間性に訴えてだけではない。愛される側の人間性の高い価値のためでもある。「セネカはこれを短い言葉にはっきりと表現した。『人は人にとって何か聖なるものである。』これに対してブルトマンは言う。「この動機づけも人間から出発する。人間の自己価値 (Selbstwert) が所与のものとして確立されているのである。人間は何か価値あるもの、聖なるものであるから、人間愛、博愛の要請が成立する。そしてその至高の冠が敵への愛なのである。」「人間の自己価

値」とは「人間は自らで価値を持っている」ということであろう。

このように、愛し・愛される双方に高い人間性を前提するヒューマニズムからの愛の立場に対してブルトマンは言う。「イエスの愛の要求は全然別様に基礎づけられている。すなわち（愛す人の）性格の強さや人格的品位の思想にではなく、服従の思想、自己主張の断念という思想に基礎づけられている。」更にまた「イエスは愛の要請を基礎づける時、他の人が（つまり相手が）人であるがゆえに持つ価値に言及しない。……愛敵は一般的人間愛の頂点ではなく、克己、自己主張の断念の頂点なのである。」

こうして、ブルトマンは「ヒューマニズム」に基づく愛の思想に対してイエスの愛の教えを対峙させているのであるが、それは、ヒューマニズム（人間主義）が人間の「自己価値」（人間はそれ自身で価値を持っているということ）を前提し、その価値を全面的に發揮させる愛を説いたのに対して、イエスはそうではなく「神の絶対命令への自己犠牲的服従」の愛を説いたからである。しかし、これは一体どういう対比なのであるか。そもそもきちんとした対比になっているのであろうか。ヒューマニズムが人間の自己価値を踏まえる愛を説いているのであれば、それと正面から対立する思想とは人間の「自己価値」ではなく、人間の「他者価値」（他者から賦与された価値）を前提する愛を説く立場ではないのか。人間に価値を賦与し得る「他者」とは創造者である神以外にないのであるから、人間の自己価値を最大限に發揮させる愛を説くヒューマニズムの主張に正面から対立するものは、自分に価値を賦与された神の御心に沿ってその価値を最大限に發揮させるよう説く立場ではないのか。迷い出た一匹の子羊を、九十九匹を山に残しても、捜し出す牧者の話をして、「これらの小さな者が、一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」（つまり、人間はすべての一人一人が創造者である神にとって失われ

てはならない貴重な価値を持つ存在なのだ」と語ったイエスの立場はまさにそれであり、それを継承するのがキリスト教ではないか。

「自己価値」対「他者価値」こそが正真正銘の対立である。この首尾一貫した対比の議論の中になぜ「神の絶対命令への自己犠牲的服従」が後者を引きずり下ろして、代わりに入らなければならないのか。犠牲とは何を犠牲にすることか。神はご自身が人間に与えたもうた、発揮されるべき高い価値までも犠牲にせよと人間に命じられるのか。生命や時間や財産や名声等を犠牲にすることは命じられるであろう。しかしパウロの言葉を借りて言つて、「霊の結ぶ実」としての「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」¹⁶（ガラテヤ5・22―23）までも犠牲にすべきなのか。むしろこれらの高い価値の実現のために自らの生命や時間や財産や名声等を捧げることが正しい自己犠牲ではないのか。勿論、この言葉はパウロのものであって、イエスのものではない。しかし、イエスの弟子達は元々イエスの中にこういった価値観があるのを感じなかったのに、これらの価値を、自分達で「無」から「創造」したのか。神と「一体」になり切ったイエスに弟子達が「聖なる」姿を感じることなくして、彼らがイエスを「キリスト」として仰ぐに到ったことが、そして弟子達同士が互いを「聖なる」者と呼び合うことが起こり得たであろうか。これらの価値は当人によって言葉で言い表されたり、主張されたりしなければ当人に存在しないと云えるものではない。生き様で、行動で、態度で、顔の表情で、眼差しで、周囲の者に「感じ取られる」価値があるのであり、そういう本人によって「生きられている価値」こそ本物の価値ではないか。

今やブルトマンの主張が全体としてどのようなものであるかが明らかになっているであろう。彼はヒューマニ

ズム（人間主義）からキリスト教を引き離すに当たって、それと一緒に、およそ「人間の価値への愛」というものをキリスト教から一切除去してしまったのである。曰く、ヒューマニズムでは「人間は何か価値あるもの、聖なるものであるから、人間愛、博愛の要請が成立する。」しかし「イエスは愛の要請を基礎づける時、他の人が人であるがゆえに持つ価値に言及しない。」イエスは人間が尊い存在、聖なる存在だから愛しなさいと説くことはない——そう彼は断言するのである。勿論、言葉でそう説くことはイエスにない。しかしイエスの態度はどうか？人間の創造者である神にとって人間は本来価値あるもの、聖であるべきものであり、人間をこの上なく愛される神は、人間をその価値を失った状態——罪——から救出されるために御子を犠牲にされた——これが単なるヒューマニズムを超えるキリスト教の本来の主張であり、それはイエスの生涯を貫いていたことを言葉化したことではないか。「人間は価値あるものである」ということが「自己価値」であること、つまり人間が神抜きに自分で自分に価値を認め、その十全な発揮を目指すことがイエスにとってもキリスト教にとっても問題なのである。なぜなら、イエスもキリスト教も人間に価値を付与するのは神だとみなすからである。神からの恵みとして受けた私の価値は神の御心に沿うように発揮させられなければならないのである。

六

以上のことを見れば、ブルトマンが隣人愛について、それは感情的なものでないと述べる一連の言葉も如何に

根拠が乏しいか、如何にイエスの言動に反しているか、歴然としていよう。ブルトマンの思想に著しいことは、神や隣人への愛の意志の働きを強調する余り、これらの愛の感情面を嫌悪感をすら持って一蹴しているように思われることである。彼は「同情の感情や感動に基礎づけられた愛は本当は自己愛なのである」と言い切っていた。では、既に見たように、神―イエスが永遠の命に到る道を探ねた相手（おそらく青年だと見なされて来ている）を「慈しみ（愛し）」ながら、彼の「欠けている」一点を指摘して、貧しい人々への自己犠牲の道を指し示したとき、神―イエスは自己愛から――ブルトマンの考える「自己愛」つまり「自己中心の愛」からそうしたのか？その時の、神と一体になっているイエスの慈しみは、「墮落し切った主体の中にすらかなお神的なるものを、高貴な失われることのない人間性の閃きを、感じとって感動させられた同情や讃嘆の感情によるもの」⁽¹⁷⁾ではないのか？そうでないなら、なぜイエスは彼を「見つめ」「慈しんで」「言われたのか？慈しみの目で見つめること程深く、しかも高みを見据えつつ、相手を「尊び愛す」ことはないのではないか。それとも、このときの相手は「墮落し切った」とまでは言えなかったから慈しんだのであり、そうではない場合、つまり文字通り墮落し切った相手に対してであった場合には、イエスは慈しんでこのような言葉をかけることはなかったはずなのか？

或いは、また、イエスの話を聴きに来た群衆が飼い主のない羊の群れのような有様であるのを見て、「深く憐れまれた」とき、神―イエスは「自己愛」（「自己中心の愛」）からそうしたのか？この箇所のは、*ἐπιτακτικὴν ἐπιτακτικὴν* を英訳聖書 (KJV 他) が “was moved with compassion toward them” と訳しているのは、またルター訳が “*jammerte im derselben*” と訳したのは、誤訳か？⁽¹⁸⁾

「同情の感情や感動に基礎づけられた愛は本当は自己愛なのである。」——ブルトマンのこの言葉を根拠のない独断として斥ける筆者は以下の数々の言葉も同様に全く受け入れることはできない。

「愛は他者の個性をよるこび、それを育てることをよるこぶことでもない。というのはイエスにあっては人は全然そのように個性としては見られていないのである。」

「理想主義的義務論、徳論、或いは善論、価値論の意味でのイエスの倫理を求めることがどんなに誤りであるか」

七

ブルトマンがイエスの説く愛から単なる「センチメンタルな感情」を「自己愛」（彼の言う意味での、即ち自己中心的愛）に基づくものとして除去することは勿論正当である。しかし問わなければならないことは、感情というものは如何なるものもすべてセンチメンタルなもので、「自己愛」から出るものなのか、である。あの青年に対するイエスの深い慈しみはセンチメンタルな感情で、イエスの自己愛から出ていたのか。そうブルトマンは考えるのか。イエスのあの飼い主のいない羊の如き群衆への深い憐れみもセンチメンタルな自己愛からの感情か。いずれにせよ、ブルトマンにはセンチメンタルでない感情をイエスの愛に積極的に認める言葉は一言もない。彼はイエスが説く愛からセンチメンタルではない感情すらも、つまり一切の感情を、除去してしまっているのである。既に見たように、彼はヒューマニズムが目指す価値を自己中心的（人間中心的）な価値だとして斥けたが、

そしてそれは正当であるが、その際、自己中心的是でない、神中心的な価値が存在するということが向かいたために、価値の追求をすべて自己中心的な行為だと決めつけて排除してしまい、従ってイエスの説く愛からも神中心的な価値の追求を除去してしまっていた。それと並行する、否、軌を一にする、ことが、ブルトマンの中で、感情に関しても起こっているであろう。彼は「友情や異性の愛は自然的自己の表現である。それらは自身としては善くも悪くもない。それらは人の意志が悪い時に悪いのである。しかしそれらの中に神による愛の戒めの成就をみるのは、この戒めをいつわり、従順な隣人愛の代りに自己愛をすえることである」と言っている。そういう自己中心的な友情や恋愛は勿論ある。それが普通であろう。しかし、だからと言って、なぜ友情や恋愛が即自己中心のだと決めつけられなければならないのか。神を中心にして結ばれる友情や恋愛は絶対に存在しないのか。極めて困難であり、稀ではあっても、キリスト者はそれを目指すことが求められているのではないか。ヒューマニズム的（人間中心的）な友情や恋愛は山とあるであろう。しかしだからといって、友情や恋愛の中の感情が必ず自己中心（人間中心）のものだとなぜ断定できるのか。神中心に結ばれた、単に「センチメンタル」ではない感情の友情や恋愛があるはずであり、キリスト者はそれを追求することをこそ求められているのではないか。そして、その時、友人同士は、また恋する二人は、単に「ヒューマニスティック」ではない高い価値を目指すのではないか。

以上、ブルトマンには、一方では「自己中心（つまり人間中心）」でない価値を排除することが、またもう一方では自己中心（人間中心）でない感情を排除することが起こっているが、この二つは一体のことである。価値は「感じられる」ものなのであるから。彼は自己中心（人間中心）の価値とそれに対する感情と共に、神中心の

価値とそれに対する感情をも一緒に排除してしまった。その結果が「イエスの命じる愛は意志（のみ）だ」という断定である。

しかし我々は言わなければならない。愛はそれ自体はやはり感情である。愛は相手を優しく、暖かく、柔らかく包み、相手と一体になることを求めて人をそこへ動かす、深く、本源的な感情である。

八

ブルトマンは第八段落で、「だからキエルケゴールがこう言うのは正しい」と述べて、キルケゴールが『愛の業』の中で「自己愛」に言及している以下の部分を引用していた。

「隣人を自分のように愛すべきであると言われる時、この掟は合鍵であるように自己愛の城を開き、自己愛を人から奪う。もし隣人愛の掟が自分のようにという一片の言葉以外のもので表現されていたら、掟は自己愛を屈服させることは出来なかったであろう。この一片の言葉は実に用い易いけれども、実は永遠の緊張力を持っているのである。この「自分のように」は曲げもこじつけもできない。それは、永遠の鋭さを以て裁きながら、人が自分を愛しているその内奥の隠家に侵入する。自己愛に言い訳の余地は一寸も残さず、少しの逃道も開けておかない。何と驚くべきことだろう。人はどのようにその隣人を愛さなくてはならないか、長い気の利いた演説をぶつことができません。しかし自己愛はいつも言い訳を、逃道をしつらえる術を知っている。それは事柄がやりすつかり尽くされてはいないで、一つの場合が見逃され、一つの点が充分正確或いは拘束的に記述表現されて

いないことがあるからだ。しかしこの「自分のように」は—— 実際どんなレスラーも、この掟が自己愛を組み伏せるように、敵をこうもすっかりと、こうも逃げられぬように、組み伏せることはできないのだ。¹⁹⁾

引用によってブルトマンが強調したいことは、要するに、キルケゴールも隣人愛の戒めは人間から自己愛を剥奪すると書いているということである。確かにキルケゴールはそう書いている。しかし見逃してはならないことは、もう一方では、キルケゴールは上の引用の直ぐ近くで、次のようにも書いているのである。「しかもこの言葉（自分のように隣人を愛せ」筆者補足）」は、人間から自己愛を剥奪するものではなくて、実はかえって、正しい自己愛を教えようとするのである。²⁰⁾ 或いはまた「戒めは『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』と語っているのであるが、正しく理解するならば、それとは全く逆のこと、すなわち『正しい仕方、自分自身を愛せよ』ということをも語っているのである」²¹⁾、或いは「自分自身を正しい仕方であらうと愛すること、隣人を愛することとはびつたりと相応しているのであって、畢竟全く同一のものなのである」²²⁾、更には「それゆえ律法は、君が自分を愛するように隣人を愛するときには、君は隣人を愛するように君自身を愛さねばならぬ、というのである」²³⁾とも。

キルケゴールは、さすがに正当にも、「自己愛」に「利己的な自己愛」と「正しい自己愛」とを区別し、隣人愛の戒めは前者を斥けるが後者とは結びつくとして述べているのに、ブルトマンは自己愛を利己的なものと決めつけ、勝手にキルケゴールを味方に引きつけている。これを我々はどう受け止めるべきか。

総括

取り上げたブルトマンの議論全体の総括を行おう。

ブルトマンは「隣人を自分のように愛しなさい」という第二の愛の戒めを取り上げて、この戒めは実際は「自分を愛すことを放棄して隣人を愛しなさい」であると述べて読者を驚かすのであるが、それはどこから来たのか。それは彼が隣人愛の極限の場合、つまり隣人が敵である場合を、つまり「敵への愛」を念頭に置いて、終始それを分析するからである。確かに、敵への愛の場合には自分を愛すということを断念し、自己を完全に放棄しなければならぬ、と言えるであろう。（但し、その場合の自己愛は神の前で自分に執着する自己中心的な自己愛である。）また、敵への愛の場合には感情抜き「断固たる意志」の塊にならなければならないから、愛から感情が徹底的に排除されることにもなる。

敵への愛が隣人愛の極限の場合であることは間違いない。⁽²⁴⁾ また隣人への愛の根底に常に自己犠牲の用意が存在しなければならぬことも間違いない。しかし、問題は隣人愛は敵への愛の場合だけに限られるのかである。はるかに多くの日常的な場合には、隣人愛は敵への愛ではなく、まさに隣人への愛、親しい隣人と相互に愛し合う隣人愛の場合ではないか。⁽²⁵⁾ この一般的な隣人愛の場合を視野に入れなかったことが、ブルトマンの考察全体を著しく狭めただけでなく、歪めてしまった。自己中心的でない、正しい自己愛——神の恵みの愛の導きに従って自らを高められ、「聖化」される自己への愛までが排除され、あたかも自己の価値を追求することがすべて不純

であるかのようにみなされたのである。

筆者の考察は、この極端を廃し、イエスがごく日常的な場面でも人々を愛されたに違いない点に目を向けて、イエス・キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する」(エペソ3・18)ことに努めるものであった。

最後に、キルケゴールからの影響は顕著であるが、それは既に論じた引用されている箇所以外に、例えば「あれかーこれか」という言葉や、「決断」の強調などに見られる他、言葉こそ引用されないが、「単独者」の概念にあるのではないかと、筆者には思われる。要するに、ブルトマンは神の前に「ただ独り」として立ちつつイエスの愛を分析しているのである。それが隣人同士が愛し合う場合に考察の目を向けることを疎かにさせてしまったのではないか。キルケゴールは文字通り隣人から疎外された状況の中で「単独者」として執筆に没頭したのであった。

註

- (1) 『《尊びの愛》としてのアガペー』(2015年、教文館)、「ニエグレンのアガペー思想から『《尊びの愛》としてのアガペー論』へ」(『宗教と文化 34』聖心女子大学キリスト教文化研究所、2018年)等。
- (2) R.Bultmann: Jesus (Tübingen: J.C.B.Mohr, 1964, C1926) 川端純四郎・八木誠一訳『イエス』(未来社、1963年)
- (3) 例えばニエグレンは、アガペーに関する必読の文献と言うべき著書『アガペーとエロース』で、ブルトマンの『イエス』から⑨の前半の段落をそのまま引用している。(岸千年・大内弘助共訳『アガペーとエロース』I、

69頁以下) 詳細な考察は別の機会に譲らなければならないが、アガペーの理解において、ブルトマンのニーグレンへの影響は決定的に大であると思われる。

(4) ブルトマンがこう述べていることは、次第に見るように、すこぶる重要である。「愛の戒め」つまり「愛すべし」という言明のみを問題にするということは、「愛(する)」という言葉にのみ注目して、愛の行為・表現・表情・感情には目を向けまいということになり得るからである。

(5) *Selbstachtung* 訳者は「自己顧慮」と訳しているが、*‘Gefühl für die eigene menschliche Würde’*と解説される語(『DUDEN Deutsches Universal Wörterbuch?』で、むしろ「自敬・自尊」(相良守峯編『大独和辞典』)がふさわしいであろう)。

(6) 第二の愛の戒め「あなたは自分のようにあなたの隣人を愛すべきである」(*Ἐνταυτοῦ τὸν πλησίον σου ὡς ἐνταυτοῦ. Thou shalt love thy neighbour as thyself.*) は正確には「あなたは自分を愛すべきであるようにあなたの隣人を愛すべきである」(Thou shalt love thy neighbour as thou shalt love thyself.) であって、「あなたは自分を愛しているようにあなたの隣人を愛すべきである」(*ἐνταυτοῦ τὸν πλησίον σου ὡς ἐνταυτοῦ. Thou shalt love thy neighbour as thou lovest thyself.*) ではないのではないか。

しかしこれに対しては反論があり得るであろう。人は誰でも自然に自分を大事に、或いは大切に、するものであり、そのように、そのことに基づいて、隣人をも大事に、大切に、すべきである、というのが第二の戒めの主旨である、と。しかし、自分を自然に大事に、大切にする自己愛は自己中心性を免れているであろうか。免れないものであっても、それに倣い、それに基づいて、隣人を愛せよ、第二の愛の戒めは命じているのか。そうではなく、むしろ「自分を真に大事に(大切に)すべきであるように隣人を真に大事に(大切に)せよ」ではないか。自分を愛すことの方が土台にされるのは、自分を真に大事に(大切に)することは他人をそうする場合と異なって、誰においても「文句なしに」受け入れられるからではないか。

しかし、もう少し詳細に検討しよう。

「君は兄のように速く走るべきだ」(①)は「君は、兄が速く走るべきであるように、速く走るべきだ」ではない。兄が(現に)速く走っているように、君も速く走るべきだ」である。それと同様に、「君は自分のように

君の隣人を愛すべきだ」(②)は「君が現に自分を愛しているように、君の隣人をも愛すべきだ」である。これはそのまま受け入れられるだろうか。

①で「兄のように」と言われる時、兄は（走ることに）模範・手本とされている。同様に②で「自分のように」と言われるのは、愛すことにおいて自分は模範・手本だと考えられているからである。——「こう言えるだろうか。こう言われて、①はすんなり認めることができるのに、②はそうではないのはなぜか？それは現実の「自分への愛」というものが模範・手本になるとはとても思えないからである。なぜなら「自分を愛す」ということは極めてしばしば自分中心に、つまり利己的に、なされるからである。自分中心に自分を愛したら、とても隣人をきちんと愛すことはできない。

しかし、「自分中心に自分を愛す」ことを手本にするなら、それに倣う道は「自分中心に隣人を愛す」ではなく、「隣人中心に隣人を愛す」であり、つまり「自分中心に自分を愛すように、隣人中心に隣人を愛しなさい」であり、それこそが神の教えではないか。

しかし、自分の側が自分中心に自分を愛していたら、とても隣人を隣人中心に愛すことなどできない。なぜなら、「自分中心」とは複数の人がいる中で、「自分が中心」であるということであり、相手と自分の二人の場合には、相手ではなく自分が中心であるということなのだから、隣人を中心とせず、自分を中心にして愛すということなのである。自分を中心にするということ、隣人(他人)を中心にするということは相容れないこと、どちらか一方しか成立しないこと、なのである。そこから、ブルトマンは「愛の第二の戒め」——「隣人を自分のように愛すべきである」は実際には「自分を愛すことを放棄して、隣人を愛すべきである」だと解釈したのである。しかし自分を愛すことは必ず自分中心になされると決まっているのだろうか。そうでない場合もあるのではないか。そして、手本にすべきなのは「自分中心にでなしに自分を愛す」自己愛であり、「自分中心にでなしに自分を愛すように隣人を愛しなさい」というのが第二の愛の戒めではないか。自分中心の自己愛は「正しい自己愛」とは言えず、手本にはならないのであり、第二の愛の戒めは「正しく自分を愛すように隣人を愛しなさい」ではないか。ところで、正しく自分を愛すことは、第二の愛の戒めを守ろうとする人にとって、必ずしも現実のことではなく、むしろ目標である。従ってその点を汲み取れば、第二の愛の戒めは「自分を正しく愛す

べきであるように隣人を正しく愛すべきである」なのである。

更に次のように言うべきであろう。

以上のようにであるから、ブルトマンが「自然な自己愛を取り除いて、隣人を愛すべきだと主張したことは間違っているわけではない。ただ、それだけはまだ半分しか正しくないのである。なぜなら、そう言っただけでは、自然な自己愛を取り除いて、その代わりにどうすべきなのかは何も言っていないからである。「いや、言っている。隣人を愛すべきだと言っているではないか」では答にならない。隣人をではなく、自分をどう愛すべきなのかである。「自然なままの自己愛」ではなく、どういう自己愛に立って隣人を愛すべきなのか。答は直ぐ前に見た通りである。「自然なままの自己愛」ではなく、「自己中心でない正しい自己愛」である。そして「自己中心でない正しい自己愛」にはまだ到達していないのであるから、「第二の愛の戒め」は「自分を（正しく）愛すべきであるように、隣人を（正しく）愛すべきである」なのである。いずれにせよ、「隣人を自分のように愛すべし」という戒めは正しい自己愛の放棄を命じているなどということはあり得ないはずであることをしっかりと抑えておく必要がある。

(7) 「自己愛」を直ちに「利己的な愛」とみなすことは、少なからざる人に見られることであるが、それはそもそも「利己的」(egoistic) という言葉の意味を正確につかんでいないところから来ることを筆者は多々見て来ている。「利己的」とは自分の益・福を求めるということではなく、自分の益・福を他者のそれに勝って求めることである。相手が勝るように、また相手と同等に、自分の益・福を求めることは少しも利己的ではない。

(8) *tyktmōv*、通常聖書の中で「愛す」と訳されているアガパオー (*agapao*) のアオリスト形。

(9) この引用の前後は以下の通りである。17イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。18「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」19イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天

- (10) ὀφθαλμοὺς οὐκ ἔχει (はらわた) と関係ある語。はらわたが痛くなるほど、相手と思いを共にして憐れむ。 *to be moved with compassion*
- (11) ブルトマンはこの箇所全く目を向けていない。
- (12) ブルトマンはこの箇所を引用している(122頁)が、この句の元の形はマタイ5・48「だからあなた達は天の父上が完全であられるように、完全であれ」だったろうとして、実質的には全く取り上げない。
- (13) 「神―イエス」という表記は神と一体であるイエスを言い表すために用いる。
- (14) ブルトマンはこの箇所全く目を向けていない。
- (15) このように見てくる時間わかれてくることは、そもそもブルトマンは愛の戒めを問題にしたのかということである。愛と限らず、およそ何事であれ、神が命じることには人間は絶対服従することが求められているのではないか。イエスがペテロ達に弟子となるよう命じたときも、目を覚ましてるように命じたときも、同じではないか。ブルトマンはイエスの「愛すべし」ではなく「愛すべし」を、問題にしたのである。愛の本質をではなく、イエスの命令の本質を問題にし、それは自己犠牲的意志の決断の要請だと言っているのである。そしてそれなら、間違いなく正しく、何の問題もない。思い起こされることは、段落①の中でブルトマンが述べていた次の言葉である。「愛という言葉と愛の戒めとはイエスの言葉の中にはきわめて稀にしか出て来ない……イエスもその教団も愛の要請をもって特別の倫理的プログラムを設定しようとは考えていなかったことがよく解るのである。むしろ愛の要請は神の意志を行なえとの、一般的要求の中によく嵌めこまれる。」(傍点、筆者)彼は特に愛を問題にしたわけではなく、愛もその中に嵌め込まれる神の命令一般を問題にしたのである。
- (16) 筆者は「自己価値」(自分が自分自身に認める価値)と反対のものを「他者(神)によって付与される価値」と捉えたが、しかし「自己価値」を「自分だけの価値」と捉え、その反対を「共同の価値」と捉えることもでき

るかも知れない。ここでパウロが列挙する諸々の価値は後者であろう。しかしこれらは「霊の実」―聖霊がもたらす価値―なのであるから、まさに「他者(神)によって付与される価値」でもある。「自己価値」とその反対ではこの両面が意味されている取るべきかも知れない。

因みに、筆者は、ブルトマンに逆らって、アガペーは人間性の高い価値と深く関わりと主張するが、しかし「人間性の高い価値」とは勿論「名誉・地位・権勢等」を指すのではない。これらは人間の「自己価値」であろう。そうではなく、一言で言えば、パウロに示されているように、霊的に高められた価値、神と人々との平和に結びつく価値がイエスと弟子たちが目指すものである。

- (17) この引用箇所は厳密には「隣人への、敵への愛は、墮落し切った主体の中にすらなお神的なるものを、高貴な失なわれることのない人間性の閃きを、感じとって、感動させられたセンチメンタルな同情や讃嘆の感情に基づくものではなく、(beruht nicht auf einem getürten und sentimental Gefühl der Sympathie oder Bewunderung.)、神の命令である」であるのに、日本語訳ではなぜか「感動させられたセンチメンタルな」が抜けている。ブルトマンがアガペーはセンチメンタルな感情などではないと言おうとしているのであれば、それに反対する理由は全くない。しかし彼が「墮落し切った主体の中にすらなお神的なるものを、高貴な失なわれることのない人間性の閃きを、感じとる」ことを即「センチメンタルな同情や讃嘆の感情」とみなして、イエスからそれを除去しようとしているなら、それは断じて認めることができない。センチメンタルではなしの、ここに描かれるような同情や賛嘆の感情がイエスにあることを見ることができないところに、ブルトマンがイエスの愛に届かないことが如実に示されているであろう。

- (18) 日本語訳が「同情」と訳した、ブルトマン自身の言葉「Sympathiegefühlen」の中の「Sympathie」は英訳聖書の「compassion」と同義語で、共に「同情」とか「共感」の意味であるはずである。ドイツ語訳の「jammern」と「Mitleid erregen」と解説される。(DUDEN Deutsches Universal Wörterbuch)

- (19) 『キルケゴール著作集、第15巻(白水社)愛の業』(武藤一男・芹津文夫訳)では33頁

- (20) 「愛の業」34頁。

- (21) 同書41頁。

(22) 同書41―42頁

(23) 同書42頁

(24) 但し筆者には次のように捉えるのが適切であるように思われる。

イエスは敵への愛を隣人愛の極限の場合と捉えた。従って「自分のように敵を愛しなさい」と教えることができた。しかしブルトマンは敵への愛を隣人愛の外に立てた。そして「自分を愛すことを止めて、敵を愛せ」と主張した。

(25)

「親しい隣人との相互の愛し合い」ということは、聖書の教えやイエスの教えを知らない人々の間でも、日常生活の中で自ずから生まれ、自ずから働く（例えば、台風被災地のボランティア支援に見られるように）ものだと考えられるが、そうなるどキリスト教的意味での愛「アガペー」とそういう愛とは異なるということになるのか、異なるならどこが異なるのか、という問題が起ころである。おそらく二つはその価値（尊さ）において異なることはいささかもないが、しかも異なる決定的な点は、アガペーは、神の愛を信じる者によって、その愛に生かされる意識の下で生まれるものであり、そこから神の聖性に与って「聖なる愛」であると感ぜられることであろう。そういう意識は自然な愛には当然ないと思われる。但しアガペー愛は、神を意識しない人々の自然な愛をアガペーに劣るものと見ることは露ほどもなく、そういう人々の愛も、自らのアガペーと共に、神の導きと祝福の内にあることを感じて、一体になって愛し合うのである。